

実践報告

病院で4年次に社会福祉士の実習を行う学生に対する実習指導

—日本女子大学における4年間の経験—

赤澤 輝和

Practical Training for Fourth-Year Students Undergoing a Training of a Certified
Social Worker in a Hospital

—Four Years of Experience at Japan Women's University—

Terukazu AKAZAWA

本論文の目的は、4年次に病院で社会福祉士の実習を行った学生に対する実習指導経験を整理すること、および3年次に実習を行う学生と比較可能なデータを検討することである。対象は、2014年度から2017年度までに4年次に病院で実習を行った17名、延べ25病院である。方法は、先行研究で特定した実習指導や実習の資料から得られるデータを収集した。その結果、医療福祉分野の履修状況、実習前・実習中・実習後の状況、国家試験と卒業後進路の状況についてデータが整理され、実習指導・実習の中で生じた事象に対する改善プロセスも記述することができた。今後、3年次で実習を行う学生と比較可能なデータとプロセスについて明らかになった。

キーワード：社会福祉士実習指導、病院、4年生

1. はじめに

日本女子大学社会福祉学科（以下、本学）では、前身の日本女子大学校社会事業学部を含め、多くの医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）を輩出し、日本の医療ソーシャルワークの発展に寄与してきた（日本医療社会事業協会 2003; 高橋 2016）。本学では1988年の社会福祉士及び介護福祉士法施行時より社会福祉士の養成がはじまったが、資格化以前より実習は必修科目であった。また、当時は社会福祉士の実習施設としては認められていなかった病院での実習も別コースで可能となっていた（日本女子大学社会福祉学科八十年史

編纂委員会 2003）。2006年に社会福祉士の実習施設として病院及び診療所が追加され、以後は主に社会福祉士の実習施設のひとつとして病院での社会福祉援助技術現場実習（以下、実習）が行われるようになった。

筆者は、2013年4月に医療福祉の担当教員として本学に着任した。講義の中核科目は医療福祉論であり、実習は医療福祉分野を担当することになった。着任初年度前期からは、前任教員が配属を行っていた病院と介護老人保健施設で実習を行う4年生の指導がはじまった。また後期からは、2014年度の実習に向けて医療福祉分野に配属さ

れた 3 年生の社会福祉援助技術現場実習指導（以下、実習指導）を担当した。つまり、医療福祉分野で実習を希望する学生に対する事前面接から実習指導、実習までのすべてのプロセスに関わったのは 2014 年度に実習を行う学生がはじめてである。

先述の通り、本学では社会福祉士の実習は 4 年生のときに行なわれていた。3 年生と比較し、目的意識が高い状況で実習に臨めるなどの利点がある一方、民間企業就職活動との重なりが懸念されていた。実際、実習を行った学生の卒業後の進路として民間企業への就職希望は年々高まっていた（小泉 2008）。このような状況の中、採用選考に関する指針が改訂され¹⁾、実習への影響がさらに高まることが予測された。

そのため、本学では 2015 年度入学生より社会福祉士の実習を 3 年生へ移行することになった。実習履修者の増加が期待できる、福祉職への理解を深めてから卒業後の進路選択ができるなどの利点がある一方、目的意識や基礎的知識の不足などが懸念された。そして、2017 年度は実習年次の移行に伴い、4 年生と 3 年生が同時に実習を行い、2018 年度からは 3 年生での実習に完全移行した。これらのことから、4 年生の実習はどのようなものだったか検証することには意義があると考ええる。

本論文の目的は、先行研究で特定した実習指導や実習の資料から得られるデータをもとに（赤澤 2016）^{2) 3)}、4 年次に病院で社会福祉士の実習を行なった学生に対する実習指導経験を整理すること、および 3 年次の実習と比較可能なデータを提示することである。

2. 社会福祉士の実習指導・実習履修と医療福祉分野の状況

(1) 履修状況

今回対象となった学生の入学年度は 2011 年度から 2014 年度であり、入学定員は 1 学年 88 名で

あった⁴⁾。図 1 に社会福祉士実習指導・実習履修と医療福祉分野の状況を示す。データは、在籍者数は中央研究室、実習履修者数は実習室より取得した。

2014 年度から 2017 年度に 4 年次で実習を行うため、前年度の 3 年次から実習に向けた社会福祉援助技術演習、および実習指導の履修がはじまる。4 年間合計の 3 年次在籍者数は 377 名であり、1 年度平均 94.3 名であった。そのうち実習履修者は 101 名、1 年度平均 25.3 名、実習履修率は 26.8% であった。

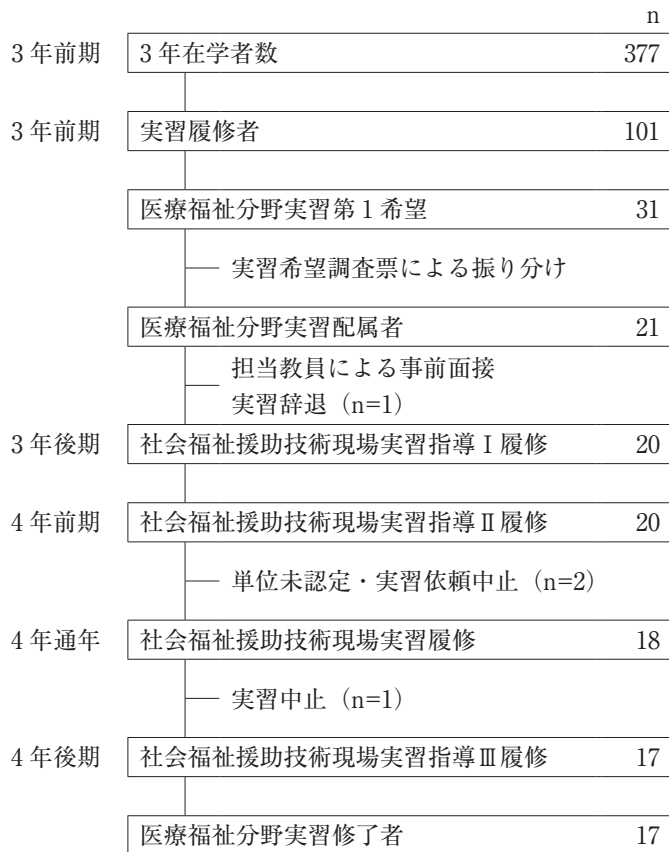
実習履修者 101 名のうち医療福祉分野での実習を第 1 希望としたのは 31 名、実習履修者に対する割合は 30.7% であった [11-1・11-2]。実習希望調査票の記載内容により振り分けを行ない、21 名（20.8%）が配属された。配属者が決定した後、各分野事前面接⁵⁾を行い [11-3]、3 年次後期からの実習指導を履修することになった学生は 20 名であった。事前面接後、実習を辞退した学生の理由は公務員試験への専念であった。事前面接時に語られることが多かった不安や疑問は、実習に対する漠然とした不安 [11-4・11-5]、どのような病院にいくか [11-6]、どのような事前学習をすればよいか [11-7]、実習記録が書けるか [11-8] であった。

3 年次後期より実習指導を開始し、4 年次後期すべての実習指導および実習の履修を修了した学生を医療福祉分野実習修了者（以下、実習修了者）とした。実習修了者は 17 名であり、修了率は 80.9% であった。実習依頼の中止、および実習中止理由は、いずれも民間企業の就職活動による出席不良であった [11-9]。

(2) 医療福祉分野配属者背景

医療福祉分野に配属された学生 21 名の背景を表 1 に示す。データは、実習希望調査票を基に、事前面接時に加筆したものから取得した。また通

図1 社会福祉士の実習指導・実習履修と医療福祉分野の状況



学時間は、学生が実習希望票に記載した最寄り駅と最寄り駅から自宅までの時間を基盤として、本学最寄り駅までの乗り換え案内の結果、本学最寄り駅から本学までの徒歩15分を加え算出した⁶⁾。

居住地は神奈川県が最も多く、自宅を出発してから本学キャンパスまでに到着するまでの平均通学時間は片道61分であった。履修中の資格課程は社会福祉士のみが85.7%であり、大学受験時に他大学も含め社会福祉学科が第1志望だった学生は52.4%、大学入学前からMSWを知っていた学生は33.3%であった。

医療福祉分野での実習希望理由は、事前面接時に学生が語った内容について類似性をもとに3カテゴリーに分類した。【MSWへの関心】は大学

入学後MSWという職種を知りさらに学びたくなった、【MSWになりたい】は卒業後の進路としてMSWを希望している、【様々な人と関われる】は、幅広い年齢層の患者や他職種と関われる機会が多いのではないかとすることを意味し、希望理由として【MSWへの関心】が最も多かった。卒業後の進路希望としては、MSWを選択肢のひとつとして考えている学生は95.2%であった[11-10]⁷⁾。

3. 実習前の状況

(1) 実習先病院背景

実習先の病院は、学生の居住地、病院の特徴をもとに3年後期の実習指導Ⅰの履修状況をみなが

表 1 医療福祉分野配属学生背景 (n=21)

		n	%
大学通学時間片道 (分)	平均 ± 標準偏差	61 ± 27	
居住地	神奈川県	11	52.4
	東京都	7	33.3
	埼玉県	3	14.3
履修中の資格課程	社会福祉士	21	100.0
	精神保健福祉士	3	14.3
	教員免許	1	4.8
大学受験社会福祉学科志望	第 1 志望	11	52.4
	第 2 志望以下	10	47.6
	大学入学後	14	66.7
MSW を知った時期	高校生	6	28.6
	中学生	1	4.8
	MSW への関心	10	47.6
希望理由	MSW になりたい	7	33.3
	様々な人と関われる	4	19.0
	MSW	7	33.3
卒業後の進路希望	ソーシャルワーカー (MSW 含む)	5	23.8
	MSW または民間企業	5	23.8
	MSW または公務員	3	14.3
	公務員	1	4.8

ら配属調整を行なった [11-11]。配属の基本方針は、二次救急指定病院や地域医療支援病院といった地域の急性期病院とした。理由は、入院患者と外来患者が多いこと、多様な社会的背景や傷病を抱えた患者に対応しているためである。加えて、学生の希望や履修状況に応じて、実習を 2カ所に分けて行った [11-12]。2カ所実習を行う意義として、医療機関の特徴によって MSW の役割の違いが学べ、さらに共通基盤を考察できるからである [11-13]。

実習修了者 17 名、延べ 25カ所の実習病院背景を表 2 に示す。データの取得は実習施設等の概要と実習ノート (実習施設・機関の概要) から取得した。また、病床数、病院類型、病床機能については、実習病院のホームページと各都道府県の病床機能報告から実習年度の情報を収集した。許

可病床数は平均 533 床、MSW 人数は平均 6.4 人名であり、所在地は神奈川県が最も多かった。病院類型は医療法の病院の類型、病床機能は医療法の病床機能報告に基づき分類した。実習依頼回数は、2014 年度から 2017 年度内における依頼回数であり、4 年間のうち 1 度のみの実習依頼が最も多かった [11-14]。

(2) 学生が設定した実習目標

3 年後期の実習指導での学習内容、実習先の事前学習を踏まえて実習目標を作成した [11-15]。各年度 4 月下旬から 5 月上旬に実習室へ提出し、実習先へは実習事前オリエンテーション前までに発送された。

学生が設定した実習目標を表 3 に示す。データは実習生個人紹介票から取得した。実習目標

表2 実習先病院背景 (n=25)

		n	%
許可病床数	平均±標準偏差	533.0 ± 292.0	
MSW 人数	平均±標準偏差	6.4 ± 3.0	
所在地	神奈川県	12	48.0
	東京都	10	40.0
	静岡県	2	8.0
	埼玉県	1	4.0
病院類型	地域医療支援病院	11	44.0
	一般病院	9	36.0
	特定機能病院	5	20.0
病床機能	急性期	18	72.0
	高度急性期	16	64.0
	回復期	2	8.0
	慢性期	2	8.0
実習依頼時間	180 時間	9	36.0
	120 時間	8	32.0
	60 時間	8	32.0
実習依頼回数	1 回	13	52.0
	2 回	1	4.0
	3 回	2	8.0
	4 回	1	4.0

表3 学生が設定した実習目標^{*i}

	n	%
病院組織の理解（方針・機能・特徴）	0	0.0
病院内の各組織の理解	0	0.0
組織の中でのソーシャルワーク部門の理解	19	15.2
ソーシャルワークについての理解	29	23.2
クライアント、家族、それを取り巻く環境についての理解	20	16.0
援助プロセスに沿ったソーシャルワークの理解	53	42.4
組織に働きかけるソーシャルワークの業務理解	2	1.6
地域に働きかけるソーシャルワークの業務理解	2	1.6
その他のソーシャルワーク業務理解	0	0.0

^{*i} 学生が設定した目標の総数は125であった

は、保健医療ソーシャルワーク実習指導基本プログラム（日本医療社会事業協会 2008）の「目標」を参考に9 カテゴリー作成し、学生が作成した実

習目標の意味している観点から分類、集計した。
学生17名が25ヵ所の実習先病院に対し作成した実習目標の総計は125あり、1人平均7.4で

表 4 実習状況

		n	%
実習日数	平均±標準偏差	25 ± 1	
実習時間	平均±標準偏差	187 ± 6	
実習通勤時間片道 (分)	平均±標準偏差	49 ± 19	
実習カ所数	1カ所	9	52.9
	2カ所	8	47.1
学生の出退勤	欠席回数 (回)	9	2.2
	遅刻回数 (回)	4	1.0
	早退回数 (回)	0	0.0
実習中指導	帰校日指導回数	1 回	11.5
		2 回	13.1
		3 回	54.1
		4 回	13.1
		5 回	8.2
	巡回指導回数	1 回	85.2
		2 回	14.8
	緊急対応数 (回)	13	3.1
	帰校日指導時間 (分)	平均±標準偏差	81.6 ± 3.9
	巡回指導時間 (分)	平均±標準偏差	90.4 ± 37.2
	巡回指導移動時間片道 (分)	平均±標準偏差	67.0 ± 29.1

あった。最も多かった実習目標のカテゴリーは、【援助プロセスに沿ったSWの理解】であった。また、設定した実習目標がなかったカテゴリーは【病院組織の理解】、【病院内の各組織の理解】、【その他のSW業務の理解】であった。理由として事前学習の範囲という認識、メゾレベルのソーシャルワークまで事前学習でカバーできなかった可能性がある。

4. 実習中の状況

(1) 実習状況

社会福祉士の実習は、厚生労働省の施行規則に基づき実施している（厚生労働省 2011）。すなわち、実習時間は180時間以上、2カ所に分けて実習を行う場合はそのうち1カ所は120時間以上としている。また、実習期間中少なくとも1回以上

の巡回指導を行い、残りは帰校日指導で対応した。

学生の実習状況を表4に示した。データは、実習希望調査票、実習生個人紹介票、実習ノート（自己評価表）、社会福祉援助技術現場実習帰校日・巡回指導記録（以下、帰校日・巡回記録）、実習生出勤簿より取得した。

実習は1カ所で行った学生が1名多く、学生あたりの平均は実習日数25日、実習時間は187時間、実習通勤時間は片道49分であった⁸⁾ [11-16]。学生全員の総実習日数419日に対する欠席率は2%、遅刻率は1%、早退率は0%、緊急対応率3%であった [11-17・11-18・11-19]。緊急対応は、実習継続・中断・中止を検討する可能性がある事案をカウントした。カウントは1事案あたり1回とした。具体的には大学の欠席届に該当す

表5 主な実習内容^{*i}

	n	%	
講義	207	9.5	
各部署見学	112	5.1	
日報、月報、年報の精読	2	0.1	
文献による確認	165	7.5	
ケース記録、カルテ等の精読	313	14.3	
ソーシャルワーカーの業務に同行、観察	面接	489	22.4
	部署内の会議	264	12.1
	他職種との会議	18	0.8
	他機関との会議	7	0.3
	訪問	16	0.7
	地域の会議	3	0.1
院内他職種との連携場面同席、観察、カンファレンス参加	417	19.1	
地域関係機関との連携場面同席、観察	17	0.8	
援助プロセスの体験	131	6.0	
研修参加	25	1.1	

^{*i} カウントした実習内容の総数は2186であった

ること（傷病、忌引き等）、実習契約や倫理綱領への抵触の恐れであった。帰校日指導総回数は61回、巡回指導総回数は27回であった。また、帰校日指導総時間4961分（82時間41分）、巡回指導総時間2215分（36時間55分）、巡回指導移動往復総時間3524分⁹⁾（58時間44分）であった。実習指導・実習を行うにあたっては、社会的スキルの獲得（高梨2016; 塩田2017）、時間的負担（福富2010; 日本社会福祉士養成校協会2015; 赤澤2017）を検討することの重要性が示唆されている。

(2) 主な実習内容

学生が病院で行った主な実習内容を表5に示す。データは、実習ノート（実習記録）から取得した。主な実習内容は、保健医療ソーシャルワーク実習指導基本プログラム（日本医療社会事業協会2008）の「プログラム」を参考に10カテゴリー、6サブカテゴリーを作成し、実習内容の意

味している観点から分類、集計した。なお、今回の集計では業務観察、自己学習、振り返り、スーパービジョンの記載は除いた。理由は、主たる実習内容を踏まえての二次的プログラムであったからである。

実習ノート（実習記録）の実習内容の欄には、総計2186あり、1名あたり総実習期間中延べ129の実習内容を経験した。最も多かった実習内容としては、【ソーシャルワーカーの業務に同行、観察】の〔面接〕であり、次に【院内他職種との連携場面同席、観察、カンファレンス参加】であった。逆に最も少なかったのは【日報、月報、年報の閲覧】と【ソーシャルワーカーの業務に同行、観察】の〔地域の会議〕であった。背景としては、多かった理由として病室訪問など非構造化面接も経過状況などを評価する意味から面接としてカウント、外来や病棟での連携場면을観察する機会を含めたこと、退院調整におけるカンファレンス自体の増加などが考えられる。一方、少なかった理

表6 帰校日指導・巡回指導における教員から学生に対する指導内容

	帰校日指導 ^{* i}		巡回指導 ^{* ii}	
	n	%	n	%
実習指導者との指導上の関係の持ち方	24	9.6	9	8.2
利用者やその家族とのかかわり方	3	1.2	0	0.0
職員とのかかわり方	1	0.4	1	0.9
他の実習生とのかかわり方	0	0.0	0	0.0
実習目的の確認	34	13.6	16	14.5
実習プログラムの確認	54	21.6	24	21.8
不足する知識・技術への対応	51	20.4	21	19.1
モチベーションの低下への対応	4	1.6	0	0.0
学生の個人的に抱えている課題への対応	34	13.6	19	17.3
実習記録の書き方の指導	33	13.2	14	12.7
学生が抱えるストレスへの対応	12	4.8	5	4.5

* i 帰校日指導内容総数 250

* ii 巡回指導内容総数 110

由としては、日報、月報、年報の閲覧についてはそのデータについて講義等で伺っている可能性、地域の会議へは実習期間中に開催されなかった、時間外のため同行させることができなかったなどが考えられる。

(3) 帰校日指導・巡回指導における教員から学生に対する指導内容

実習期間中、教員から学生へ行なった帰校日指導、および巡回指導の内容を表6に示す。データは、帰校日・巡回記録から取得した。指導内容は、日本社会福祉士養成校協会（以下、社養協）が行なった調査の回答選択肢を用いて（日本社会福祉士養成校協会 2015）、帰校日・巡回記録の記述内容から分類、集計した。

実習期間中の帰校日指導内容総数は250、巡回指導内容総数は110であった。最も多かった指導内容は、帰校日と巡回ともに【実習プログラムの確認】であった。一方、全く実施しなかったもの

は帰校日では【他の実習生とのかかわり方】、巡回では【利用者やその家族とのかかわり方】、【他の実習生とのかかわり方】、【モチベーションの低下への対応】であった。これは、病院での実習は同時に実習生を複数受け入れることが難しいこと、体験型の実習ではないことが考えられる。

(4) 巡回指導における実習指導者と教員の打ち合わせ内容

実習巡回指導時に実習指導者と教員の打ち合わせ内容を表7に示す。データは、帰校日・巡回記録から取得し、打ち合わせ内容は、社養協の調査の回答選択肢を用いて（日本社会福祉士養成校協会 2015）、記述内容から分類、集計した。

巡回指導総数27に対して打ち合わせ実施割合が100%だったものは【実習指導者から実習生の様子や実習内容を確認する】と【実習プログラムの進捗状況を確認する】であった。一方、20%以下だったものは【教員の巡回訪問指導時におけ

表7 実習巡回指導における実習指導者と教員の打ち合わせ内容 (n=27) *ⁱ

	n	% ^{* ii}
実習指導者から実習生の様子や実習内容を確認する	27	100.0
帰校日での指導内容や実習生の様子を実習指導者に伝える	20	74.1
教員の巡回訪問指導時における指導内容や実習生の様子を実習指導者に伝える	5	18.5
養成校側の教育方針や教育内容を伝え、実習指導者の実習内容や指導方法とのすり合わせを行う	12	44.4
実習内容や指導方法と養成校の指導内容のすり合わせを行う	4	14.8
実習プログラムの進捗状況を確認する	27	100.0
実習指導者による実習スーパービジョンの実施状況を確認する	15	55.6
今後の実習の進め方を確認する	24	88.9
実習指導者と実習生と教員の三者で実習の様子や実習内容を確認する	24	88.9
実習生に対し実習指導者と共同でスーパービジョンを行う	18	66.7
今後の実習の進め方を三者で共有する	22	81.5

*ⁱ 巡回指導は25ヵ所で27回行なった

*ⁱⁱ 巡回指導27回に対する割合

る実習指導内容や実習生の様子を実習指導者に伝える」と【実習内容や指導方法と養成校の指導内容のすり合わせを行う】であった。

また、巡回指導時に実習指導者より担当教員に対して、「学生が突然思ってもみなかった不安を表出することがある。普段から実習に対してどんな疑問や不安を抱いているのか知れば」と語った[11-20]。さらに複数の実習指導者から本学では行っていない実習報告書の発行や実習報告会開催の要望があった[11-21・11-22]（赤澤 2017）。

5. 実習後の状況

(1) 実習評価表

実習評価表は、実習指導者が学生に対する評価を実習期間終了後に記載するものである。12項目の5段階評価と所見、総合評価の自由記述を記載する構成となっている。実習指導者は記載後、本学実習室へ郵送し、実習室から担当教員に渡され実習事後指導に用いられる。

実習評価表の集計を表8に示す。データは実

習評価表から取得した。「非常に優れている」と評価された割合が最も高かった項目は「指導を真面目に受け止める」であった。「普通」以下と評価された割合が最も高かったのは「仕事上の責任を果たす」であった。また、実習指導者の50%以上が「評価できない・評価に該当しない」と回答した項目は「利用者と適切にコミュニケーションがとれる」、「個人または集団に対して適切な援助ができる」であった。これは、病院での実習が体験型ではなく、理解型という特徴が影響していると考えられる。

(2) 自己評価表

自己評価表は、学生が実習期間終了後に記載するものである。13項目を4段階で自己評価し、総合評価について自由記述する構成となっている。学生は実習終了後に記載し、実習ノートの一部として実習室へ提出する。総合評価という4段階評価の項目以外、実習指導者が記載する実習評価表と評価項目は同じである。

表8 実習評価表 (n=25)

評価項目	評価点 ^{* i}						平均± SD ^{* ii iii}
	A (%)	B (%)	C (%)	D (%)	E (%)	NA (%)	
専門職としての倫理を身につけている	14(56.0)	8(32.0)	3(12.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.4±0.7
仕事上の責任を果たす	16(64.0)	5(20.0)	2(8.0)	2(8.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.4±0.9
積極的・主体的に学習をすすめる	15(60.0)	8(32.0)	0(0.0)	2(8.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.4±0.8
指導をまじめに受け止める	24(96.0)	0(0.0)	1(4.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.9±0.4
施設・機関の目的及び機能を理解している	13(52.0)	10(40.0)	2(8.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.4±0.6
施設・機関が地域社会において果たすべき役割を理解している	12(48.0)	10(40.0)	3(12.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.3±0.7
利用者を理解しニーズを把握している	10(40.0)	10(40.0)	5(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.2±0.7
利用者と適切にコミュニケーションがとれる	4(16.0)	4(16.0)	3(12.0)	0(0.0)	0(0.0)	14(56.0)	4.0±0.8
個人または集団に対して適切な援助ができる	3(12.0)	5(20.0)	3(12.0)	0(0.0)	0(0.0)	14(56.0)	4.0±0.7
適切な記録が書け、整理・保管・活用している	15(60.0)	7(28.0)	2(8.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(4.0)	4.5±0.6
自分自身の性格・行動傾向について、よく自覚し洞察している	9(36.0)	11(44.0)	5(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4.1±0.7
施設・機関の職員やボランティアと良い協力関係を作っている	15(60.0)	3(12.0)	5(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(8.0)	4.4±0.8

^{* i} A：非常にすぐれている、B：やや優れている、C：ふつう、D：やや劣る、E：かなり劣る、NA (No Answer)：評価できない・評価に該当しない

^{* ii} A：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点、NA：欠損値とした

^{* iii} Standard Deviation：標準偏差

自己評価表の集計を表9に示す。データは自己評価表から取得した。ただし、実習室へ自己評価表が提出されなかったものが8カ所分認められた。これは学生が自己評価表を実習ノートの一部として認識していなかった可能性がある。今回集計に用いた自己評価表は全実習先病院25カ所中17カ所分(68%)である。

学生が「十分にできた」と70%以上が評価した項目は「指導を真面目に受けた」と「仕事上の責任を果たす」であった。また、「あまりできなかった・ほとんどできなかった」と評価した割合が70%以上だった項目は「利用者と良い対人関

係をつくることができた」と「個人または集団に対して適切な援助をおこなった」であった。これは、実習指導者が記載する実習評価表と異なり、「評価できない・評価に該当しない」という回答選択肢の設定がないため、学生は「あまりできなかった・ほとんどできなかった」を選択した可能性がある。

6. 国家試験と卒業後進路の状況

病院で実習を行った学生にとって国家試験と進路は重要である。なぜなら、病院の実習指導者が望ましいと考える学生の進路として、MSWを目

表9 自己評価表 (n=17) *ⁱ

評価項目	評価点* ⁱⁱ				平均±SD* ⁱⁱⁱ
	1 (%)	2 (%)	3 (%)	4 (%)	
専門職としての倫理を身につけた	0 (0.0)	1 (5.9)	10 (58.8)	6 (35.3)	3.3 ± 0.6
仕事上の責任を果たす	0 (0.0)	2 (11.8)	3 (17.6)	12 (70.6)	3.6 ± 0.7
積極的・主体的に学習を進めた	1 (5.9)	2 (11.8)	10 (58.8)	4 (23.5)	3.0 ± 0.8
指導を真面目に受け止めた	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (23.5)	13 (76.5)	3.8 ± 0.4
施設・機関の目的及び機能を理解した	0 (0.0)	2 (11.8)	10 (58.8)	5 (29.4)	3.2 ± 0.6
施設・機関の社会に対する果たすべき役割を理解した	0 (0.0)	4 (23.5)	9 (52.9)	4 (23.5)	3.0 ± 0.7
利用者を理解し、ニーズを把握している	1 (5.9)	4 (23.5)	10 (58.8)	0 (0.0)	2.6 ± 0.6
利用者との良い対人関係をつくることができた	6 (35.3)	6 (35.3)	3 (17.6)	0 (0.0)	1.8 ± 0.8
個人または集団に対して適切な援助をおこなった	10 (58.8)	3 (17.6)	2 (11.8)	0 (0.0)	1.5 ± 0.7
適切な記録を作成し、整理・保管・活用した	0 (0.0)	1 (5.9)	11 (64.7)	5 (29.4)	3.2 ± 0.6
自分自身の性格や行動傾向についてよく自覚し、洞察できた	0 (0.0)	3 (17.6)	11 (64.7)	3 (17.6)	3.0 ± 0.6
施設・機関の職員やボランティアと良い関係を結ぶことができた	0 (0.0)	3 (17.6)	9 (52.9)	5 (29.4)	3.1 ± 0.7
総合評価	0 (0.0)	1 (5.9)	16 (94.1)	0 (0.0)	2.9 ± 0.2

*ⁱ 学生が記入、実習室へ実習ノートの一部として提出するものだが未提出8ヵ所あり

*ⁱⁱ 1:ほとんどできなかった、2:あまりできなかった、3:ほぼできた、4:十分

*ⁱⁱⁱ Standard Deviation: 標準偏差

指していることが最も多く、その他分野のSWを目指していることを含めると75%を占めている(赤澤 2017)。また、診療報酬上で社会福祉士が評価されたことにより、新卒MSWの募集要項において国家試験不合格の場合は採用取り消しと明記されることが多くなったからである。

実習修了者の国家試験と進路状況を表10に示す。データは、中央研究室、実習室、在学中学生から取得した。社会福祉士の合格率は82.4%、MSW内定者のみで見た場合は85.7%であった¹⁰⁾ [11-23]。精神保健福祉士は卒業後の進路に関わらず100%であった。卒業後の進路としてMSWを希望した学生は82.4%であり、すべての学生がMSWの内定を得た¹¹⁾ [11-24]。内定先の病院は実習先病院の特徴と類似していた。また、2014年度以降内定年度までに同一開設者内含め本学か

ら実習実績のあった病院への採用率は50%であった。

卒業後MSWを希望しなかった学生の共通点として、実習で多忙かつ緊張感のある現場を体感し、新卒で働く自信がないというものだった。一方、MSWを希望した学生は、その点にやりがいや魅力を感じた傾向があった。

7. 実習指導・実習の改善プロセス

実習指導や学生が実習を行う中で生じた事象に対する対応を表11に示した。実習指導・実習については、厚生労働省の指針に基づく社会福祉士養成校協会相談援助実習指導・実習ガイドラインに準じて実施し(日本社会福祉士養成校協会2015)、病院での実習に特化した内容を加えている。今回、実習指導・実習の改善プロセスを記述

表 10 国家試験と進路の状況

資格		受験者特性	受験者	合格者	%	
国家試験 (n=17)	社会福祉士	実習修了者	17	14	82.4	
		うち MSW 内定者	14	12	85.7	
	精神保健福祉士	実習修了者	3	3	100	
		うち MSW 内定者	2	2	100	
職種		職種	n	%		
進路 (n=17)	病院	MSW		14	82.4	
	介護老人福祉施設	介護職		2	11.8	
	民間企業	一般職		1	5.9	
項目		小項目	n	%		
内定病院背景 (n=14)	許可病床数	平均±標準偏差		596.0 ± 344.3		
	入職時 MSW 人数 ^{* i}	平均±標準偏差		6.3 ± 2.8		
	病院類型	地域医療支援病院		6	42.9	
		一般病院		4	28.6	
		特定機能病院		4	28.6	
	病床機能	高度急性期		14	100	
		急性期		13	92.9	
		回復期		2	14.3	
		慢性期		1	7.1	
		実習実績	あり		7	50.0

^{*i} 入職卒業生および同時入職者を除いた人数

するにあたりアクションリサーチの方法を参考にした（内山 2007）。その結果、実習事前・実習中・実習事後を通じて 24 の事象に対して改善策を講じていた。

8. おわりに

実習指導や実習の資料から得られるデータをもとに、2014 年度から 2017 年度に 4 年次に病院で社会福祉士の実習を行なった学生に対する実習指導経験を整理し、3 年次の実習と比較可能なデータを検討した。その結果、医療福祉分野の履修状況、実習前・実習中・実習後の状況、国家試験と卒業後進路の状況に分類して提示し、実習指導・実習の改善プロセスについて記述することができた。今後の課題として、4 年次実習と 3 年次実習

のデータを比較することがあげられる。そのためには、2017 年度から 2020 年度に 3 年次で実習を行ったデータ、2020 年度に実習を行った学生の卒業後のデータが取得できる 2021 年度末まで待たなければならない。

表 11 実習指導・実習の改善プロセス

No	事象	解釈	対応
11-1	学生に病院での実習について正しく伝わっているかわからない	着任初年度のため	社会福祉実習論の1コマの中で病院での実習をバーチャル体験できるように工夫
11-2	学生が実習分野を選択するにあたり正しい情報が得られていない	教員が実習について伝える機会が限られており、学生同士の噂で判断しているため	各分野担当教員が執筆する実習分野紹介冊子を企画し、実習委員会の承認を得て作成
11-3	事前面接の時間が短い	夏期休暇前で面接日が限られているため1人あたりの面接時間が短くなる	面接を効率よく行うため、実習分野発表後すぐに配属学生全員に集まってもらい、面接の目的を伝え、資料を事前に配布し記入してきてもらうようにした 教員の面接記録フォーマットを作成
11-4	漠然と実習が不安	何をするかわからないため不安	社会福祉実習論の1コマの一部を使って実習経験を学生に話してもらうようにした
11-5	自分に実習ができるか不安	自分にできるかわからないため不安	実習指導初期に病院見学を通して、事前学習、見学実施、実習記録のフォーマットで記録作成、事後レポートを通して実習の類似体験をできるようにした
11-6	日頃の時間感覚から実習を具体化していく	通学時間内で行ける身近な病院から実習先のイメージをもってもらう	事前面接時に通学時間内にある病院を提示する
11-7	事前学習でどんなことをすればいいかわからない	何をするかわからないため不安	ポートフォリオ形式の実習ハンドブックを作成し、学習成果を蓄積
11-8	実習記録の書き方がわからない	書き方がわからないため自分にできるか不安	面接場面を視聴し記録作成し、実習記録の書き方について講義。その後、再度視聴し学習成果を実感してもらう
11-9	民間企業就職活動による出席不良	学生にとって採用試験日に限っては授業や実習より優先度が高くなる	実習委員会で出欠席基準を明文化し学生へ提示
11-10	病院の実習指導者はMSWを目指している学生が実習にきてほしい	後進育成という実習に対するモチベーションが高まる	実習分野紹介冊子の中で、期待する学生像としてMSWを目指している、または強い関心があることを記載
11-11	複数名で行う実習指導では学生の率直な考えが聞けないことがある	集団ではなく個別対応も必要	3年後期の実習指導で初期・中間・期末の個別面接を実施
11-12	学生が急性期の病院しかイメージできない	急性期の病院しか知らないため	実習先を決めるにあたり、高度急性期から慢性期の病院見学を実施

11-13	1ヵ所で実習をする場合、急性期の病院だけになる	配属の基本方針を急性期としているため	実習中、法人内の他機能病院等に見学実習できないか依頼する
11-14	既存の大学登録の実習先ではカバーできない	学生の居住地等を考慮して実習配属先を調整しているため	実習先を新規に開拓するため、訪問説明時使用できる医療福祉分野実習紹介冊子を作成
11-15	学生が実習目標を設定することが難しい	実習目標は、総括的な概念をもつ動詞を用いて記載しているため	観察可能な達成課題、希望する実習方法、事前学習内容を検討できるシートを作成
11-16	実習指導者から実習条件は自宅から病院まで通勤時間は90分以内と提示されたことがある	通勤時間が長いと負担が大きく実習に影響するため	90分以内の通勤時間を目安に実習配属調整
11-17	学生の社会的スキルが不十分	必要な社会的スキルについて具体的に理解していないため	過去実習中に生じたインシデント・アクシデントの事例を作成し、必要な社会的スキルを具体的に学習
11-18	事前指導の中で実習中のリスクマネジメントを検討しても対応できない	リスクマネジメントの実行力が乏しいため	課題提出や病院見学时にリスクマネジメントが実行できるか確認する
11-19	実習開始後、心身の不調を訴える	潜在的な健康上の不安がある可能性	教員以外のリソースも知ってもらうためカウンセリングセンターと連携した実習指導を実施
11-20	実習指導者が普段から学生がどんな疑問や不安を抱いているのか知りたい	実習早期の段階では学生も緊張しており、実習指導者には表出しにくい	学生が実習に対する期待や不安を記述した実習志気を作成し、実習計画書と同封送付。これをもとに事前オリエンテーション時のコミュニケーションを促進
11-21	実習指導者より実習報告書発行の要望	本学では発行していないため	医療福祉分野独自で作成
11-22	実習指導者より実習報告会開催の要望	本学では開催していないため	既存の開催内容では問題がありそうのため、実施可能性かつ効果的な方法を検討
11-23	MSW 内定者が社会福祉士国家試験不合格	勉強不足 勉強の仕方がわからない	同様のモチベーションを有するMSW 内定者を対象に国家試験対策実施
11-24	MSW という進路を決める	民間企業とことなり就職活動情報が不足している	卒業生 MSW と実習生交流会を定期的に開催

謝辞

本論文作成にあたり、在学生や就職データを収集してくださいました中央研究室の吉田美佐緒様、実習資料を提供してくださいました実習室の池田恵子様、山口亮子様に感謝申し上げます。また、社会福祉士の実習を受け入れ、指導いただきました病院のソーシャルワーカーの皆様に深謝申し上げます。

註

- 1) 一般社団法人日本経済団体連合会は採用選考に関する指針の中で、企業は2016年度入社以降の大学卒業予定者への広報活動は卒業年度に入る直前の3月1日以降、選考活動は卒業年度の8月1日以降とした。翌年改訂され、2017年度入社以降の大学卒業予定者は、選考活動が卒業年度の6月1日以降となった。
- 2) 本論文では実習指導や実習の資料から得られるデータを後ろ向きに用いた。日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき対象者の匿名性に配慮し、さらに実習年度ごとのデータではなく4年間の総数を示した
- 3) 実習や実習指導の中で生じた事象に対する改善プロセスを「7. 実習指導・実習の改善プロセス」で検討するにあたり、起因となったデータへ [11-1] から [11-24] までNoをつけている
- 4) 2018年度入学試験より入学定員は97名に変更された。
- 5) 医療福祉分野の事前面接の目的は、実習に対するコミットメント、履修状況、実習希望理由、現時点での卒業後の進路希望、実習に対する不安や疑問、実習に対する希望、健康上の不安などの確認であり、1人あたり60分程度で行っている。
- 6) 経路はYAHOO JAPAN 路線情報を用いた。検索条件は、各学生の事前面接実施日、時間は1時限開始9時10分に間に合うよう読売ランド前駅8時50分着を指定し、最も推奨されるルートを採用し

た。読売ランド前駅から本学までの徒歩時間15分は大学ホームページ記載の約15分を根拠にした。

- 7) 2015年度3年生から実習分野紹介冊子を配布した。その中で期待する学生像として、卒業後医療ソーシャルワーカーを目指している、または強い関心があると記載した。冊子を配布する前は社会福祉実習論の中で同様のことを伝えていた。
- 8) 前掲6)と同様の方法を用いた。検索条件は各学生実習初日、到着時間は各学生の実習開始時間15分前に間に合うように指定した。
- 9) 前掲6)と同様の方法を用いた。検索条件は各学生への実習巡回指導日、到着時間は約束時間の15分前に間に合うように指定した。
- 10) 同期間の本学全体の合格率は52.9%、全国平均は26.8%であった。
- 11) 同期間、医療福祉分野以外からMSWになった卒業生は2名いた。

文献

- 赤澤輝和 (2015) 「社会福祉士・精神保健福祉士実習分野紹介冊子の有用性」『社会福祉』56, 1-8.
- 赤澤輝和 (2016) 「社会福祉士の実習資料はどのように活用できるか? - 病院での実習に向けた事前指導への示唆」『社会福祉』57, 125-131.
- 赤澤輝和 (2017) 「望ましい社会福祉士の実習依頼とは? - 病院の実習指導者の意向」『社会福祉』58, 85-93.
- 福富昌城・坂下晃祥 (2010) 「相談援助実習における巡回指導の役割と課題 - 週1回体制の巡回指導の事例研究」『花園大学社会福祉学部研究紀要』18, 17-30.
- 小泉秀信・中谷陽明・小山聡子・他 (2008) 「社会福祉援助技術現場実習の実態と課題 - 2000年度報告との比較を中心に」『社会福祉』49, 197-204.
- 厚生労働省 (2011) 「社会福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針」(<https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/hokkaido/faq/documents/02.pdf>, 2018.12.30).

- 日本医療社会事業協会 50 周年記念誌編集委員会編
(2003)「日本の医療ソーシャルワーク史」川島書店.
- 日本医療社会事業協会監修 (2008)「新医療ソーシャルワーク実習」川島書店
- 日本女子大学社会福祉学科八〇年史編集委員会編
(2003)「日本女子大学社会福祉学科八〇年史」日本女子大学人間社会学部社会福祉学科
- 日本社会福祉士養成校協会編 (2015)「相談援助実習指導・現場実習教員テキスト第 2 版」中央法規.
- 日本社会福祉士養成校協会 (2015)「社会福祉士養成新カリキュラムの教育実態の把握と、社会福祉士に必要な教育内容のあり方に関する研究事業実施」(<http://www.jaswe.jp/researchpaper/20151002shikennsennta.pdf>, 2018.12.30).
- 塩田祥子 (2017)「社会福祉士実習における SNS 問題に関する考察」『評論・社会科学』120, 145-164.
- 高木寛之 (2016)「社会福祉士養成における実習分野間格差の検証－相談援助実習教育に含むべき項目の分析を中心に」『社会福祉士』23, 4-11.
- 高橋恭子 (2016)「戦前病院社会事業史－日本における医療ソーシャルワークの生成過程」ドメス出版.
- 高梨未紀 (2016)「社会福祉士養成課程学生の相談援助実習前後の社会的スキル」『日本福祉大学社会福祉論集』135, 63-75.
- 横山豊治 (2014)「医療ソーシャルワーカーの人材養成の現状と課題－日本医療ソーシャルワーク学会会員へのアンケート調査より」『医療ソーシャルワーク研究』4 (3). 43-51.
- 内山研一 (2007)「現場の学としてのアクションリサーチ－ソフトシステム方法論の日本的再構築」白桃書房.